
In Girls Interval

Satch

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In Girls Interval

【Nコード】

N7511Y

【作者名】

Satch

【あらすじ】

年上のちびっこ生徒会長と、同じく年上でスタイル抜群の風紀委員長の間で巻き起こった俺争奪戦に、なぜかクラスメイトの2人も巻き込まれて、壮絶な…もといグダグダで不毛な戦いの日々を綴った物語。の予定。

第1話：ファーストコンタクト（前書き）

特に特別なことはしていません、いつもの感じですよ。

第1話…ファーストコンタクト

入学式初日に盛大に遅刻した俺は、前もって通知の来ていた自分のクラスに向かって校舎内を歩いていた。
っていうか迷っていた…。

「しかし分かりづらい学校だな…」

校舎は普通の学校のそれとは違い、増築に増築を繰り返したのか、もの凄い入り組んだ作りとなっている。

いい加減疲れてきてどこかその辺で休もうかと思えながら角を曲がると、

小学生くらいの小さな女の子が勢い良くぶつかって来た。

「うお！」

「ふにゃん！？」

女の子がぶつかった勢いのまま弾かれて倒れる前に、何とか抱きとめることが出来た。

「あぶねえ…」

何で高校にこんな娘がいるんだろう？ 今日入学式があったから誰かの父兄かな？

なんて考えていると腕の中の女の子がジタバタともがいていたので、柔らかな感触が名残惜しいが手を緩める。

勢い良く離れた女の子は、少し涙目で顔を真っ赤に染めて俺を睨む。

「何をする!」

こっちを指差し何か怒っているようだけど、アニメ声なので和み要素しかない。

「えっと…君は迷子かな?」

「んなっ!」

迷子が恥ずかしい年頃なのか、耳まで真っ赤にしながらまた睨まれた。

どうしよう…街中なら交番に連れて行くって手があるけど、高校の校内だとやっぱ職員室か?

「あ! こんなところにいた!」

その時、急に声があったので驚いてそっちを見ると、背が高くスタイルの良い女子生徒がいた。

上級生だということはネクタイの色で分かる。

「良かったね、お姉さんが迎えに来たみたいだよ?」

「会長、今度は逃がしませんよ?」

かいちよー? 変わった名前だな、っていうかなぜ敬語?

「だから私は生徒会長などやりたくないと言っている!」

ああ、生徒会長のかいちょーね：「って生徒会長!？」

「そんなこと言われても、前会長からの直々のご指名じゃないですか!」

「ふみゅ：」

「このちびっ子が、生徒会長なんですか？」

話が途切れたタイミングで、先輩の女子生徒に確認してみる。

「誰がちびっ子か!」

ちびっ子生徒会長は、手をグーにして両腕を突き上げて威嚇?してくる。

「ええ、これでも生徒会長なのよ?」

「本当に?」

「ええ」

「本当に本当?」

「ほ、本当よ」

「わたしはこれでも16歳の女子高生だ!」

「えっ!? 年上!？」

ちびっ子生徒会長は、美少女だが身長は140cmくらいで、黒髪ツインテールの残念な胸、
どう見ても小学生にしか見えない…。

「?…?…?」

困惑して上級生の女生徒に顔を向けると、嘘じゃないよという感じで苦笑いで頷いた。

…

「あー、びっくりしたあんな小さな高校生もいるんだな…」

ちびっ子生徒会長は、先輩の女子生徒に襟首を捉まれて子猫のように連れて行かれた。

「あ…クラスの場所聞けばよかった…」

自分のクラスが分からず、またフラフラきよろきよろしていると、後ろから声をかけられた。

「そこのお前、何をしている?」

振り返ると長い黒髪をポニーテールにした、ちょっとキツイ感じのする美少女がいた。
スタイル抜群で背も高く胸も大きい、さっきのちびっ子と相反するような容姿。

「えーと…俺…」

「新入生か？」

「あ、はい、教室が分からなくて…」

するとその女生徒は、なぜかはあつとため息をつく。

「お前、クラス発表の通知と一緒に入っていた案内書は見たか？」

「え？ 見て…無いと思います」

「やはりな、その案内書には迷わないよう校内の見取り図がついていたはずだが？」

「は？」

慌てて鞆を開けてクラス通知の封筒を出し、案内を確認すると確かに校内の見取り図があった。

「…ありました」

「だろう？ 今いる場所は分かるか？」

自分の位置と見取り図を確認するが、目立った目印もないので、皆目見当がつかなかった。

「えっと…わかりません…」

「ふむ」

そういうと女生徒は見取り図を覗き込む、すぐ近くに美少女の顔が迫って来たのでちよつとドキドキ。
長いまつげと吸い込まれそうな瞳が印象的で、知らないうちに見惚れていると、不意に目が合った。

「聞いているのか？」

「は、はい、見惚れています」

「み、見惚れて…！」

「あああ！ ま、間違えました！ すみません、聞いてませんでした！」

ま、まあ、この先輩ならわれ慣れてるだろうし、軽くあしらってくれるだろう。

「ふ、ふむ、でで、ではもう1度説明するじよ？」

めっちゃ動揺していらっしやる！！ 顔もほんのり赤い感じがするし！

噛み噛みの先輩の説明を、脳内補正しながら理解する。
っていうかまだ動揺してるのか？

「わ、分かったか…？」

「はい！ 今度はばっちりです！」

「な、なんなら、私が連れて行ってやろうか？」

「いえ、先輩にそんなお手間を取らせる訳に行きませんので」

「そ、そうか…もっと君のことが知りたかったのだが…」

「え？　なんですか？」

途中から何を言っているのか聞き取れなかった。

「な、なんでもない！　気を付けて行くのだぞ？」

「はい…失礼します」

：

「はあ、変わった先輩が多いな、ま、学年が違うし滅多に合わないだろう」

ようやく自分のクラスに辿り着いて戸を開けると、当然のことながらクラスの注目を浴びる。

「すみません、遅れました…」

教壇に立つ女性教師に声をかけると、ぽかんとしていた先生は我に返ると、こちらに小走りで向かってきた。

「うお！」

俺の手前30cmのところで急停止した先生は涙目で俺を見上げてくる。

「だめじゃない！ めっ！」

「す、すみません、っていうか近いっす」

20代と思わしき先生は、黒髪ボブのショートカットで眼鏡を装着した可愛らしい先生だった。

そんな先生の顔がものすごい近くにあるので、またまたドキっとする。

「先生、初日から登校拒否かと思ったわ！」

入学初日から登校拒否ってどんだけ社会不適合!？

「まあいいわ、あそこの空いている席に座りなさい」

「はい」

指定された1番後ろの席に座ると両サイドが女の子だった。

って当たりまえか、良く見ると女子の列、男子の列で交互に並んでいる。

左隣は少し赤みがかったショートカットで明るい印象の活発そうな美少女だった。

「よろしく」と挨拶すると、「よろしくー」と笑顔を向けてくれた。

右隣は長い黒髪で、あまり表情の無い、印象の薄い感じの女子だった、でも美少女の部類には入ると思う。

「よろしく」と挨拶すると、こちらを一瞥してすぐ正面を向いてしまった…。ま、まあ初対面だからだと思わないと悲しすぎる。

ちょうど自己紹介に入るところだったらしく、まず担任の先生が自己紹介をする。

「えー名前は、津田みどりです。実は初めての担任を持ちました。ですので至らないところがあたらどんな言って下さい。ちなみに彼氏は募集中よ」

みどり先生は最後こっちにウィンクしたような気がしたが、たまたまこっち方面を向いただけかもしれない。

その後は生徒1人1人が名前と出身中学を言うくらいの簡単な自己紹介をしていく。

そこで分かったのが、左の女子は小林千歳、右の女子は影山さくらということが分かった。

そして俺の番だ「吉岡純です、小奈川中学出身です。学校名は略したらダメです」

数人の男子の笑いを取って着席する。先生はぼかーんとしてるし、女子は何人か笑いを堪えているように見えた。

生徒全員の自己紹介が終わり、休憩に入ると小林千歳が話しかけてきた。

「吉岡くんって小奈中だったんだ？」

「だから略すなど」

「えー？ あれは押すなよっていう前フリでしょ？」

「ちげーよ、えーと、こ、小林さんだっけ？」

「うん、千歳って呼び捨てでいーよ、もしくはちーちゃん」

「ち、千歳は、どこ出身だったっけ？」

ちーちゃんはスルーして呼び捨てにしたけど、女子の名前を呼び捨てってちよつと照れる。

「ひどーい、聞いてなかったの？」

「え、うん、まあ」

「まいつか、名前は聞いていたみたいだしね、私は小奈川第二中学よ」

「千歳は小奈二中じゃねーか！」

「ちょっと、声大きいよ、私がいらい娘みたいに思われるじゃん！」

千歳はプンスカ怒りながら教室を出て行ったけど、本気で怒っている感じではなかったな、トイレか？。

そこでふと右側から視線を感じたので、顔を向けると影山さんがジーンとこっちを見ていた。

「え、何？ 影山さん？」

「…さくら」

「ん？ かげや…」 「さくら」

「かげ…」 「さくら」

「か…」 「さくら」

「…」 「さくら」

「まだ言ってねーし！ もうわかったよ、さ、さくら？」

「…えへ」

さくらは嬉しそうに少しだけ笑うと、席を立て教室を出て行った、トイレか？

入れ替わりのように千歳が戻って来たので、一応声をかけておく。

「ちゃんとキレイに拭いてきたか？」

「んなっ！？」 お、お客様の中に警察関係者の方はいらっしやいますか！」

「学校にいるわけねーだろ？ それにお客様じゃねーし…」

「ちょっと純くん？ いきなりセクハラ発言ってどうなの？」

「ちょっとした冗談だが…それより急にファーストネームで呼ぶな

「！」

「純って名前のわりに不純だね！」

「いやいやドヤ顔してるけど、そんなにウマくないから！」

そこでさくらも戻って来たので、こっちにも声をかけておく。

「ちゃんとキレイに拭いてきたか？」

「ちょ…!？」

なぜか千歳が焦っているけど、さくらは無表情のままVサインを出して来た。

「…確認…する？」

さくらはスカートの両脇に手を入れてパンツを脱ごうとしていた。

「あ、いや、ごめんなさい…、今は確認しないから脱がないで！」

いやあのね確認したいのはやまやまんだけど、衆人環視の前ではマズイと思うんだ僕。

「ちょっと、今はってことは後で確認するつもり？」

「うぐっ!？」

そりゃ俺だって1男子高生として確認したいよ！ いやじっくり確認したいよ！ できれば触診も食診もしたいよ！

「変態発言禁止！」

「ええ！？」

千歳さん心を読む能力ハンパないっすね！

「っていうか、影山さんにその冗談はやばくない？」

千歳は顔を寄せてきて息のかかりそうな距離でひそひそと話しかけてきた。またまた美少女の接近に本日3度目のドキドキ。

「う、うん、俺もいまそう思った」

「そういう冗談は、わ、私だけにしなさい？」

「なぜだ！ 他の女子にもセクハラしたいじゃんか！」

「セクハラって言っちゃった！？ 自覚あったんだ！ っていうか純くんは変態野郎として高校生活を送る気？」

「…さすがにそれは嫌だなあ」

「でしょ？ だから私だけで我慢しなさい、わかった？」

なぜこいつは弟に言い聞かせるお姉さん風なんだ？

「わかった、千歳が変態だということがわかった」

「誰が変態か！ 私にセクハラして良いのは純くんだけだよ？」

「それって…え、まさか！」

千歳が真っ赤な顔をしているけど、まさかの告白？

「ち、違うわよ、高校でできた最初の友達だからだよ！」

ですよー、たった数分で告白とか有り得ないし、でも最初の友達だからセクハラOKって変じゃね？

「って、え？ 俺らもう友達だったんだ」

「友達じゃなきゃ何なの？」

「えーと…クラスメイト？」

「あー…それでいいやもう…」

千歳は何か色々なものを諦めたような、疲れた女の顔をしていた。

「あ、ごめん、やっぱ友達で」

ガールフレンドは多いにこしたことないからな！

「おっけい」

そう言うのと千歳は、にぱあっと笑った。くぱあっとじゃないぞ？

そこでまた右側から強い視線を感じたので、顔を向けるとやはりさくらがジーとこっちを見ていた。

「さくらも友達だよ」と頭を撫でる。

「…えへ」

さくらはコクンと頷いて嬉しそうに少しだけ笑った。

第2話：セカンドコンタクト？

入学2日目からはもう早速授業が始まった。

「だるう」

先生に聞こえないようにこっそりつぶやいて、本日何度目かの欠伸をした。

その時ふいに美味しそうな匂いが漂ってきたので、辺りを見回すとさくらが早弁していた…。

「…」

教科書を立ててそこに隠れるようにして食べるというオーソドックス？なスタイルだ。

つかまだ1限目だぞ？　どんだけお腹空いてるんだよ。

呆れて見ているとさくらと目が合い、お互い五秒ほど見つめ合う。するとさくらはタコさんウィンナーを箸の先で豪快にザクッと刺して、こちらに箸先を向けてきた。

「いや：食べたくて見ていたわけじゃないから」

さくらがシュンと寂しそうに項垂れてしまったから、しょうがないので食べてやる事にする。

「わ、分かったから」

手に乗せてもらおうと手を差し出すが、さくらは首をフルフルとふ

ってタコさんウィンナーをずいっと前に差し出す。

「え…食べさせてくれるってこと？」

するとさくらはコクコクと頷いて、またタコさんウィンナーをずいっと前に差し出す。

所謂「あーん」というやつだな、って付き合ってる訳でも無いのに恥ずかしいわ！

いや、付き合っても人前じゃ恥ずかしいのには変わりないけどさ！

さくらは目をキラキラさせて待っているので、タコさんウィンナーを口に入れる。

「…えへ」

嬉しそうにさくらが笑うので、まあいいか。

「ちょっと純くん何いちゃいちゃしてんのよ！」

千歳が顔を近づけて小声で注意してくる。

「いちゃいちゃはしてないだろ？」

こちらも小声で応戦する。

「分かってるの？」

「何が？」

「か、間接キスよ！」

「…っ！」

それは考えもしなかった…が、でも飲みかけの缶ジュースとかならまだしも、
箸を舐め回したわけでもないし、箸に刺さったウィンナーを食べただけだしね。

「まあさくらなら別にいいよ」

「んなっ！？　良くないわよ！」

「何で？」

「そ、それは…私だってしたいし…」

「え？　よく聞こえないんだけど？」

「なんでもない！　ばか！」

え？　何で怒られてるんだろう？

それからまた欠伸を噛み殺しながら退屈な授業を受けていると、左側から肘をつつかれたので顔を向けると卵焼きがいた。

いや違う、千歳が箸に卵焼きを刺して、こちらに向けていた。

「つて、えっ！？」

「早く食べなさいよ！」

「…いや」

「何よ！ 影山さんのは食べれて私のは食べれないっていうの？」

千歳のキャラってこんなだったか？

意識すると余計食べづらいというか…あ、でも弁当開けてからすぐ卵焼きを箸で刺したなら問題ないかなと、千歳の弁当を見るとちよっと食べてるし！

視線を千歳に戻すと、目が少し潤んでる！

「はい…あーん」

「あ、あーん」

うん、美味しい、卵焼きに罪は無いね。

「うん、千歳の味が染みててうまい」

「んなっ!？」

まあこのくらいの反撃なら許されるだろう。

…

昼休み、千歳とさくらは仲良く弁当を食べていた、いつの間に仲良くなったの？

っていうかさくらはさつき弁当全部食べてたような…もしかして2
つ目の弁当か？

千歳はさつき全部食べなかったからその残りを食べている。

「さくら、どんだけ弁当持ってきてんの！？」

さくらはちよつときよとんとしたあと、手で3を作って突き出して
きた。

「3つって…その小柄な身体の何処に入るの？」

「純くんやーらしー」

「待て待て弁当の話しだぞ？」

「ふーん、純くんが言うとなんでもそう聞こえるね」

「そんな含みは全然してねーよ！ 千歳はそんなことばっか考えて
んだな、えろい娘だ」

「えろい言うな！ 不純くん？」

「んなろう、胸でも揉んだろか！ あ、揉むほど無いですね！」

事実千歳の制服の胸はぺたーんと残念が音が鳴っている。

「んなっ！？ ちよつとさくらちゃん何か言ってやってよ！」

千歳がさくらに援軍を要請したけど、さくらは何故か意外に大きい

胸を張る。

「さくらちゃんそれは…わたしはあると言いたいのか？」

「…えへ」

さくらは得意げに少しだけ笑った。

「まさかの裏切り!？」

「ぷふっ！」

「純くん笑った!？」

「…わら…ってない…よ」

「笑いながら言っても説得力無いよ? いいもんまだ成長期だからこれから大きくなるんだから」

「…がんばれよ」

「憐れみの目で見ないでよ!」

そんなお馬鹿な会話を繰り返していると、教室が急に静かになる。

「え、何？」

見るとポニーテールと大きな胸を揺らしながら、歩いてくる女生徒がいた。

「あ！　きのうはありがとうございました」

きのうクラスの行き方を教えてくれた先輩だ。

「いや、まあ、どういたしまして」

千歳はぽかーんとその先輩を見上げていて、さくらは弁当に夢中だった。

「そういえば名前を聞いていませんでしたね、先輩」

「そうだったかな…私は影山さつきだ」

「じゃあ、影山せんぱ…」 「さつき」

「んん？　かげや…」 「さつき」

「かげ…」 「さつき」

「か…」 「さつき」

「…」 「さつき」

まだ言っただけだし、っていうか、つい最近同じようなやりとりをした気がする！

ん？　影山…？

「ああ、君だったのか、さくらが優しくてカッコイイ友達が出来たって、はしゃいでいたからついに見に来たのだ」

「…っ！」

さくらを見ると珍しく顔を真っ赤にして、むせていた。

「っていうか、もしかして姉妹ですか？」

「そうなるね、さくらとこれから仲良くしてやってくれ」

「それはもちろん」

「ただし、さくらに手を出したらどうなるか分かってるな？」

さつき先輩はどこから取り出したのか竹刀を握り締めていた。

「そ、それはもちろん」

「私になら何をして構わないのだが…」

「え？ 何ですか？」

「な、なんでもない、じゃあここからは本当の目的に入ろう」

「本当の目的？」

「言ったらう、さくらの友達を見に来たのはついでだと」

そういえばそんなことを言ってた気がするけど、その前の部分で舞い上がってたからな。

「吉岡純くん、さくらが何度も言うものだから名前を覚えてしまっ

た」

「はい…」

さくらを見るとまた顔を真っ赤にして、むせていた。

「君には風紀委員に入って貰いたい」

「え、俺が？」

「そうだ」

「俺には無理ですよ！」

「そんなことはない、君は空手の有段者だそうじゃないか？」

段を取るまでの約束で、いやいややらされてたのが空手だ。

「確かにそうですが、今はもうやめてしまっています」

「別に空手の試合に出ろと言っている訳じゃない」

「でも素人に空手を使う訳には…」

風紀委員は喧嘩などがあった場合、仲裁に入らないと行けないので、多少腕に覚えがないとダメらしい。

「まあ、そうだな、だが抑止力にはなるだろう？」

「…」

「すぐに答えを出さなくてもいい、考えておいてほしい」

「わかりました、さつき先輩」

「…っ！ も、もう1度名前を呼んではくれまいか？」

「さつき先輩…？」

「…えへ」

さつき先輩は嬉しそうに笑った、やはり姉妹というべきか、さくらと同じ笑い方だった。

…

さつき先輩が立ち去って、午後の授業に向けて鋭気を養っていると、教室にちびっ子が入ってきた。

「ちとせー、きたよー」

さつきの流れもあるし、また姉妹なのか？

「千歳…もしかしてそのちびっ子生徒会長は妹さんか？」

「誰がちびっ子か！」

え？ ツツコむのそこだけ！？

「それボケたのか、素で間違ったのか分かりづらいから」

いやボケたんだよ、素で間違い易いってことなのか？

「こんなんでも姉よ」

「こんなんでも余計だ！」

「はいはい、お姉ちゃんが言ってたの、コレでしょ？」

と言って俺を指差す、コレって酷くない？

「うん、そうだ！ いきなりイタズラされた！」

「待て待て！ 誤解されるだろ？」

教室中から非難の目が向けられてるだろうが！

「いきなり抱き付かれたって言っているのと、その時間、教室に居なかったキーワードから、

純くん、あなたが犯人だと気付いてしまったの」

何その、2時間ドラマの崖のシーンみたいなセリフ。

「千歳、ドラマの見すぎじゃないのか？」

「1度言っただけ見たかったの！」

「それよか、いきなり抱き付いたっていうのは語弊がある」

「まあね、純くんがいくら変態でも、そんなことはしないでしょ？
自信はないけど…」

「自分を信じて！ って変態言うな！ ま、合ってるけど」

「認めちゃった！？」

「出会いがしらにぶつかってさ、弾かれた勢いで転んで怪我でもされたら嫌だから、抱き止めたんだよ」

「そんなことだろうと思ったよ、聞いてた、お姉ちゃ…ん？」

千歳の歯切れが悪くなったので、ちびっ子生徒会長を見ると、ぽーっとした顔で俺を見た。

「どうした？ 電池切れか？」

「お…」

「お？」

「おま…」

ちょっと待て、変なこと口走るつもりじゃないだろうな？

「おまえ、優しいな！」

「…え、まあ」

変なことは言わなかったが、照れることを言われた！

「お礼に、おにいちゃんって呼んであげようか？」

「いや、年上に言われるとちょっと複雑な気分になるからやめてください」

「そういう嗜好もあると思ったのに、おにいちゃん」

「千歳、そういう嗜好も無くは無いけど、同級生に言われるのみな」

「…おにい…ちゃん？」

「おふっ!？」

さくらのひと言で心臓がドクンと跳ね上がったよ、何だこの破壊力は！

「私とさくらちゃんとの反応の違いが納得行かないんだけど？」

「細かい事気にするなよ、ハゲるぞ」

「ハゲないわよ!」

「女性もハゲるらしいぞ？」

「うそマジで？」

「いや知らないけど」

「知らないのかよ!？」

千歳のツツコミもなかなか鋭いじゃないか。

「漫才終わった？」

「「漫才じゃない!」」

「よし決めた!」

ちびっ子生徒会長が何かを決めたらしい。

「会長、砂遊びにするかブランコにするか決めたんですか? って
うかお昼寝は終わったんですか?」

「私は高校生だ!」

まあ唯一そう見えるのは制服だけだけだな!

「おまえ…名前はなんだっけ?」

「ん? ああ、吉岡純です」

「うにゅ、よっしーを生徒会に、かんぬー…かんにゅー…むう、ス
カウトするぞ!」

「舌がべろーんって伸びそうなあだ名を付けるな! それと勧誘な
! って、はぁ!？」

「生徒会長が1人決めていいことになってるもん!」

「いやいや、その権限に強制力はないからな？」

「ちとせー、そうなのか？」

「うん、たぶん」

「そっかー、じゃあどうしたらいい？」

「こういう場合は、考えておいてって言うのが妥当じゃない？」

「そっかー、じゃあ、よしじゅん考えておけ？」

これじゃ、どっちが姉か分からないな、ってあだ名を統一しろ！
いや違うあだ名を付けるな！

生徒会長は嵐のように去っていった。

：

「純くんすごいじゃない、いきなり主要2団体からお誘いなんて！」

「団体言うな！」

「おにいちゃん…すごい」

さくらの顔から感情は読めないけど、すっかりおにいちゃんと呼ぶのが気に入ったようだ。

「ありがとう」

さくらの頭を撫でると猫のように気持ちよさそうに目を閉じる。

「で、どうするのよ」

「千歳ーどうしよう？」

千歳のぺったーんな胸に泣き付こうとしたけど、手で頭を押さえられて阻止された。

「はいはい、こんなときだけ甘えなーい！」

「くっ…ぺったん姉妹め」

「なにをー！」

「さくらー」

さくらの柔らかい胸に泣き付く、さつき先輩に見られたらボコボコにされるかも知れない。

「おにちゃん…いい子…いい子」

さくららは特に嫌がる訳でもなく優しい表情で、俺の頭を撫でてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7511y/>

In Girls Interval

2011年11月24日14時05分発行